

弔 辞

大 野 晋

一昨年五月、宮本さんの胸のレントゲン写真が白く写っていると伺って以来、二年あまりになりました。その写真は、癒やしがたい病の徴候であると私達は説明を受けました。医学の急速な進歩が、もしや何かの手段を与えてくれるかもしれないとかすかな願いも、やはり、かなえられませんでした。

願みると、十四年前、専任としてお迎えするとき、「芭蕉文集」の綿密な注釈を岩波の日本古典文学大系にお書きになった方とは、どんなお方だろうと心待ちにしたことを覚えておりますが、それはもの静かで、大声をあげたりはなさらず、いつも細かい心づかいをもって行動される宮本さんなのでした。

宮本さんは、昭和四十九年、「蕉風俳諧論考」で文部大臣賞をお受けになりました。その研究は手堅い資料を使っていること、作品論・俳論の両面にわたって、緻密な鋭い分析と注釈を加えていること、そういう点でこの研究は高い評価を得たのでした。これは宮本さんの体質に根ざした学問の成果です。単にこの一冊だけでなく、他の何冊もの御研究も皆こうしたものだったと思います。学習院大学の国文学科は、いまこうした着実な専門家を失ったのだと、いい知れないさびしさを感じます。

しかし、大学としては、単に一人の専門家を失っただけではなく、宮本さんのような教育に責任感のあつい誠実な教師を失ったことを併せて強く感じます。

入学試験問題の出題責任者として、それぞれの学部にわたる校正のために、ひとりで身を削っておられたのを、私は何年

間も見て来ました。また学科主任としては、あれこれ面倒ななかを中正に運営するために、実にさまざまな苦心をなさったと思います。

また、宮本さんは、一昨年の春の御病気の後も、今年の春まで、ずっとひきつづき登学されて教室に出ておいででした。「はげしく咳こむことがあるんでね」と仰言りながら、真冬の寒さの中で御自身の研究室のドアの鍵を閉めて、私に「にこっ」となされた今年の一月の御様子を私は永く忘れないでしょう。

おそらく、あの時宮本さんはすでに御自身の病氣の名を御存知だったにちがいない。そうした状況にあって、つとめは果さずにおかないという宮本さんの一念を、私はそこに見たように思っています。

今、宮本さんはし残した研究に魂魄をとどめておられるかもしれません。しかし俳文学の研究の辞典を見ると、「宮本三郎は、多くの旧説をくつがえして、新たな定説を作った」と記されています。また、お教えを受けた学生の中からは近世文学に専心する者も現われて来ています。宮本さんの長年の御努力は実っているわけです。

今、お別れの時にあたって、宮本さんの御冥福を心からお祈り申し上げます。